

風姿花伝第二、
物学ものまね条々

物狂ぐるひ

此道の第一の面白おもしろ尽づくの芸
能なり。物狂ぐるいの品しな々多をほけ
れば、此一道このいちだうに得たらん達
者は十方じつぱうへ互わたるべし。繰くり
返かへく公案こうあんの要いるべき嗜たしなみ
也。

仮令けりやう、憑つき物の品しなじな、神・

〔口訳〕

物狂は能の中でも第一等の興味津々
たる芸能である。又物狂の種類は随分
多いから、此の物狂に於て奥儀を究め
た達者は、各方面に互つて何でも演じ
得るであらう。従つて物狂の学習には、
徹底的に反復研究する必要がある。

先づ大体より言つて、憑物つきものに因る

仏・生靈・死靈の咎めなん
どは、其憑き物の、体を学
べば、易く便りあるべし。
親に別れ、子を尋ね、夫に
捨てられ、妻に後るゝ、か
やうの思ひに狂乱する物狂
ひ、一大事なり。よき程の

物狂の曲——例へば神・仏・生靈・死
靈などが祟り付いて物狂になる曲——
は、其の憑いた物の本体を真似て狂へ
ば、容易であり、又狂ひの手がかりも
あるわけである。それとは別の、物思
ひ故の狂乱——例へば、親に別れ、子
を尋ね、夫に棄てられ、妻に後れるな
どの、物思ひからの狂乱の曲——は、
これは中々容易でない。相当に出来る
役者でも、この点を心に弁別しないで、
ただどれもこれも一様に狂ひ働くもの
だから、見物人の感も起らないのであ
る。物思ひからの物狂を演ずるに当つ
ては、物思ふ様子をその能の本体とし、
狂ふ所をその能の面白さを出す花とし
て、心を込めて狂ふならば、見物の感
をさそふ所も又面白味を感じしめる
所も必ず生ずるであらう。かやうな
手練によつて見物人を泣かせるやうな
所があれば、その人は無上の上手であ
るといふべきである。これを十分に心
底に思ひわけけるやうに努めねばならな
い。

為手も、此を心え分けずし
て、たゞ一偏に狂ひ働く程
に、見る人の感も無し、思
ひ故の物狂ひをば、如何に
も物思ふ気色を本意に当て
て、狂ふ所を花に当てゝ、
心を入れて狂へば、感も、面

白^{しろ}き見^み所^{どころ}も、定^{さだ}めて有^あるべ
し。かやうなる手^て柄^{がら}にて、
人^{ひと}を泣^なするところあらば、
無^む上^{じやう}の上手^{じやうず}と知^しるべし。こ
れを心^{しん}底^{てい}によくよく思^{おも}分^ひく
べし。

凡^{およそ}、物^{もの}狂^{ぐる}ひの出^{いで}立^{たち}、似^に合^あ

大体物狂ひの扮装は、似合つたやう

ひたる様^{やう}にいでたつべき事、
是^ぜ非^ひなし。さりながらとて
も、物^{もの}狂^{ぐる}ひに託^{たく}せて、時^{とき}に
因^よりて、何^{なに}とも花^{はな}やかに出^{いで}
立^{たつ}べし。時^{とき}の花^{はな}を挿^{かざ}頭^しに挿^さ
すべし。

又^{また}云^{いふ}、物^{もの}真^ま似^ねなれども、心

にいでたつべき事は勿論である。しか
しながら、物狂ひといふことに託して、
場合によつては、如何にも花やかに扮
態すべきである。又その時折の花の枝
などを、かざしにさすやうにせよ。

又、物狂も物真似ではあるが、その

得べき事あり。物狂^{ぐる}ひは、
憑^つき物の本意を狂^{くる}ふといへ
ども、女物狂^{ものぐる}ひなんどに、
或^{ある}ひは修羅、鬪^{とう}諍^{じやう}、鬼神^{きじん}
なんどの憑^つく事、これ何^{なに}よ
りも悪^{わる}き事なり。憑^つき物
の本意^{ほんい}を為^せんとて、女姿^{すがた}

物真似に於て注意しなければいけない事がある。物狂能——憑物による物狂——は、それに憑いて居る物の本体を真似て狂ひ働くものであるが、女性の物狂に、修羅や鬪諍の者が憑いたり、鬼神などが憑くなどといふのは、非常にいけないのである。何故かといへば、憑物の本体を真似ようとして、優しい女姿で、怒つたやうな所作を演ずると、全く不調和な印象を見物にあたへる。さうかといつて、女の風姿を基本としてやさしく演じては、憑物といふ方の筋が立たなくなつてしまふ。又男

にて怒^{いか}りぬれば、見所^{けんしよ}に合^あ
はず、女懸^{をんなか}かり本意^{ほんい}に為^すれ
ば、憑^つき物の道理なし。又、
男物狂^{ものぐる}ひに女なむどの寄^よら
ん事も、是^{これ}同^{をな}じ了^{れう}見^{けん}なるべ
し。所詮^{しよせん}是^{これ}体^{てい}なる能^{のう}をば不^せ
為^ぬが秘事^{ひじ}なり。能^{のう}作^{つく}る人の

の物狂に、女が憑いて狂はせるなどといふのも、前にのべた例と同じく、考慮すべきである。で、結局かやうな風体の能は絶対に演じないといふことが、此道の秘事である。かやうな曲は、その曲を作つた作者に思量分別が無いために出来たに過ぎない。此の能樂の道に於て勝れた作者であるならば、さやうに不似合な曲を書く事は先づ無い筈である。この公案を持つことが、当道の秘事であるのだ。

了簡無き故なり。さりながら、此道に長じたらん書き手の、さやうに合はぬ事を、さのみに書く事はあるまじ。此の公案を持つこと秘事也。

又、直面の物狂ひ、能を極

又直面で演じる物狂は、能を極めた

めてならでは、十分にはあるまじきなり。顔気色を其に為さねば、物狂ひに似ず、得たる所なくて、貌気色を変ゆれば、見られぬ所あり。物真似の奥儀とも申つべし。大事の猿楽などには、

上でなくては、十分には演じ得られるものではない。顔の様子を物狂らしくしなければ、物狂に似ないし、といって、能を極め達しないであつて、顔面表情などをつくるふ時には、全く見るに堪へないものとなる。従つて、直面の物狂は、物真似の奥儀であるとも言はれよう。大切な晴れの演能などには、初心の人はかやうな能を遠慮して演じないやうにすべきである。直面の大事に加ふるに物狂の大事を以てするもので、この二つの大事を一心に渾融して、而もその面白さで芸の花を開くといふ

初心の人斟酌すべし。直面

のは、如何程の大事であらう。よくよく稽古あるべきことである。

の一大事、物狂ひの一大事、

二色を一心に為して、面白

き所を花に当てん事、如何

程の大事ぞや。よくく稽

古あるべし。

〔評〕

物狂についてのべて居る所は、第一に、物狂は種類も多く、面白づくの芸であるといふ点である。種類よりいへば、男物狂と女物狂との両方があり、又丹後物狂の古作の如く夫婦共に出でての物狂もあつたやうであるが、現在四番組ものとして、最も人々の嗜好する所は、所謂物思ひ故の女物狂であらう。憑物の物狂は現在の曲にも相当に見られるが、所謂狂女物ほどの人気はないやうである。物狂の本質については、野上豊一郎氏の名著「能」の中に好論文がある。女物狂で例をとれば、幽玄第一の第三番組物に比して、見物の感興と同情をひき、芸の花の咲かせやすいやうに作曲せられて居る所が、見物に喜ばれる所であらうと

思ふ。

第二には物狂能を二種類に分つて、憑き物によつて狂ふ能と、物思故に狂ふ能の二つとし、第一の方を「憑物の体を学べば、易く便たよりあるべし」といひ、次のを、重大視して、「物思ふ氣色を本意にあて、狂ふ所を花にあてる」といふ公案を提示して居る所は注意すべきで、物狂演出の骨髓を説いた所と見るべきだと思ふ。

第三に物狂の扮装の特殊的な用意として「物狂にことよせて、時によ

つて、何とも花やかにいでたつべし。時の花をかざしにすべし」とのべて居る。これは物狂ひの心理を、うまく形の上にあらはしたものであり、且つ花めかす用意のためにもなる所、古人の苦心を味はふべきであらう。

第四に、憑き者と憑かるる者との調和的なるべき事に言及して、不調和な曲は、結局演じないのが秘事であると断じて居る。この事は、花伝第六花修にもべられて居るが、能作上にも実演上にも、其の見識の高さを見るべきであらう。

最後に直面の物狂について、その最も困難なものである事を説いてゐる所、実にもとうなづき得る。只今でも高野物狂の如き、中々に上手に見物を感じしめるやうには演じ難いやうに見た。世阿弥の論法を以てすれば、かやうなる能は、特別の事情や自信がない限りは、避けるべき曲なのであらう。

物狂の興味は、興奮のあまり常識から一步踏み出してゐる点にある。そこに異常な生氣と新鮮さがあり、見物への魅力があると思ふ。ここに、女物狂が物狂中の最も面白いものとせらるる理由がひそんでゐるやう

である。